



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	フランスにおけるスラブ研究の歴史と現状
Author(s)	外川, 継男; Togawa, Tsuguo
Citation	スラヴ研究, 12, 93-112
Issue Date	1968
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/4992
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000112899.pdf



フランスにおけるスラヴ研究の歴史と現状

外 川 継 男

- (1) は し が き
- (2) フランスにおけるスラヴ研究のはじまり
- (3) 雑誌「ル・モンド・スラヴ」(*Le Monde Slave*)の発行と「スラヴ研究所」の創立
- (4) パリ大学スラヴ研究所(L'Institut d'Etudes Slaves de L'Université de Paris)と雑誌「ルヴェ・デ・ゼチュード・スラヴ」(*Revue des Etudes Slaves*)について
- (5) 第二次大戦後の研究の発展——大学・研究機関・専門誌について
- (6) 図書館について
- (7) 最近の研究状況

は し が き

自然科学の研究にくらべて、人文・社会科学の研究には、どうしてもそれぞれの国の伝統的な研究のありかたが大きく作用するものですが、このことはスラヴ研究の場合に特に言えるように思われます。第二次大戦後スラヴ地域を対象とする人文・社会科学の研究は、飛躍的な発展をとげましたが、その中心となったのが米国の研究であることは、今日ではひろく知られているところです。ところで、この米国におけるスラヴ研究 -Slavic Studies- の一つの特徴が、従来の文献学、言語学、文学史中心の研究 -Slavic Philology- に対して、歴史学、政治学、経済学、社会学といった、人文科学、社会科学の諸部門をひろく取り入れた、いわゆる「地域研究」の一環として発展したものであることも、周知のとおりです。

わが国におけるスラヴ研究も、このような地域研究の一環として、第二次大戦後発足しましたが、そこには、従来の狭い意味での専門分科の枠を打開しようという積極的な意図の外に、philologyの研究が伝統的に欠如していたという事情も指摘されなければなりません。したがって、わが国のスラヴ研究において、これまでにも不十分ながら同じ地域研究の形をとる米国の研究が紹介されてきたこと、特に歴史学や政治学の分野では、ここ数年来米国の研究成果がかなり摂取されたり、批判されたりするようになってきたことも、ある意味では当然のことと言えるかも知れません。

しかしこの際にたえず留意しなければならないことは、学問的伝統があまり無いとか全く欠如している場合には、とかく研究が片寄りがちになるということと、その時々々のイデオロギーとか政策的配慮に左右されかねないということです。したがって、このような傾

向をできるだけ是正し、研究の歪みを少しでもただそうとするならば、ひろく各国の研究状況を歴史的にさかのぼって調べ、その特色を理解するとともに、すぐれた成果は大いに取り入れるよう努めなければなりません。わが国のスラヴ研究において、従来ロシア以外の地域がとかく無視されたり軽視されてきた事実、また比較的研究者の多い文学や歴史の分野でも、近代に研究が集中しすぎている事実は、いずれも理由があつてのことで、これを一概に非難することはできませんが、いずれも大きな弱点であることにはわかりありません。

ところでフランスは、スラヴ研究の分野ではながい伝統をもち、第二次大戦までは指導的役割を果してきた国の一つで、その研究については当然わが国においても紹介されて然るべきなのに、今までまとまった紹介はほとんどなかったようです¹⁾。しかし、後に述べますように、文献学、言語学、文学、歴史学研究の上では、すでに以前から幾多のすぐれた業績をもち、また近年においては新しい研究・教育機関や専門誌を創設して、いわばスラヴ研究のリバイバルを行いつつあるフランスの動向は、わが国の研究者がもっと注目してよいように思われます。

私は1966年10月から1967年5月まで、フランス政府の給費留学生として、パリ大学の「スラヴ研究所」に留学しましたので、この際フランスにおけるスラヴ研究のあり方をふりかえて考えてみたいと思います²⁾。

フランスにおけるスラヴ研究のはじまり

フランスにおけるスラヴ研究の歴史は、1840年コレージュ・ドゥ・フランス (Collège de France) にスラヴの言語と文学の部門が設けられ、ポーランド・詩人アダム・ミツキ

-
- 1) 私が見た限りでは、わが国においてこの分野の紹介をしたものとしては、わずかに山本香男里「スラヴ学雑誌」(*Revue des Etudes Slaves*)、『比較文学研究』、第8号、1964、129-132頁：山本俊朗「フランスにおけるスラヴ研究の新しい成果—ポルタル教授の近業を中心として—」『社会経済史学』、Vol. 32, No. 4, 1966, 105-108頁があるにすぎません。
- 2) 本稿を草するにあたって参照した文献は以下の通りです。
1. Louis Eisenmann, "Ernest Denis, 1849-1921," *Revue des Etudes Slaves*, tome I, 1921, pp. 138-143.
 2. Louis Eisenmann, "Slavonic Studies in France," *The Slavonic Review*, Vol. I, No. 2, 1922, pp. 295-305.
 3. B. Unbegaun, "Slavonic Studies in France," *The Slavonic Review*, Vol. 7, 1928-29, pp. 694-698.
 4. *Inauguration de l'Institut d'Etudes Slaves de l'Université de Paris, 17 octobre 1923.*
 5. *Bulletin Annuel de l'Institut d'Etudes Slaves de l'Université de Paris, I Année scolaire 1927-28, II Année scolaire 1928-29, III Année scolaire 1929-30, IV Année scolaire 1930-31.*
 6. *Institut d'Etudes Slaves, Annuaire 1964, Annuaire 1966, Annuaire 1967.*
 7. Alfred Fichelle, "Origine et développement de l'Institut d'Etudes Slaves (1919-1949)," *Revue des Etudes Slaves*, tome XXVII, 1951, pp. 91-103.
 8. Marianne Seydoux "Les thèses concernant la Russie et l'U.R.S.S. soutenues en France de 1888 à 1964," *Cahier du Monde Russe et Soviétique*, Vol. VI, No. 3, 1965, pp. 437-465.
 9. Roger Portal, "Изучение истории СССР во Франции," *История СССР*, 1959, No. 1, стр. 229-239.

フランスにおけるスラヴ研究の歴史と現状

エヴィッチ (Adam Mickiewicz) が初めてこれを担当した時にさかのぼることが出来ません。しかし、この講座は常置のものではなく、フランス人としてコレージュ・ドゥ・フランスの講座の正式の教授となったのは、1885年に就任したルイ・レジェ (Louis Léger)³⁾ が最初でありました。彼はこれより9年前の1876年に東洋語学校 (L'Ecole Nationale des Langues Orientales Vivantes) にロシア語の講座を創設した人物で、学問的出発点としては、すでに1868年25才の時に「キュリロスとメトディオス」で学位をとり、以下に述べますエルネスト・ドゥニ (Ernest Denis)⁴⁾ と共に、フランスにおけるスラヴ研究の草分けといえることができます。

しかしフランスのスラヴ研究の歴史において、その第一の業績はやはりドゥニに帰せられねばなりません。彼は普仏戦争に志願兵として参加したあと、1873年プラハにフスの研究に行き、1878年「フスとフス戦争」でドクトラを得、その後スラヴ研究所の創設に際して中心的役割を果し、初代所長となった人です。フランスのスラヴ研究におけるこのドゥニの位置は、丁度イギリスにおけるバーナード・ペアズ (Bernard Pares) や、イタリアのロ・ガット (Lo Gatto) に比することができましよう。

1880年代になりますと、フランスにロシアの小説がはなばなしく紹介されるようになり、ヴォギュエ (Eugène-Melchior de Vogüé) の「ロシアの小説」⁵⁾ が著わされたりしました。また歴史の分野では古典とも言うべきルロワ・ボーリュウ (A. Leroy-Beaulieu) の「ツァーリの帝国とロシア人」や、ランボー (A. Rambaud) の「起源から1884年までのロシア史」が出ました⁶⁾。このランボーは1896年から98年まで文部大臣の職にあった人で、その立場から公式的にもスラヴ研究を奨励したと言われています。そして、フランスの大学で正式に講座としてロシア語・ロシア文学を担当した (1892年よりリール大学文学部において) エミール・オーマン (Emile Haumant) は、彼の女婿でもありました。オーマンは1902年にパリ大学のロシア語・ロシア文学の講座の教授に就任するとともに、1885年以来ルイ・レジェが占めていたコレージュ・ドゥ・フランスの講座をも担当することになり、リール大学の後任には、若い言語学者のリロンデル (André Lirondelle) が就任しました。オーマンはその後、名著「ロシアにおけるフランス文明 (1700-1900)」⁷⁾ を著わし、風俗習慣、教育、文学、政治思想、宗教にわたって、フランスとロシアの文化的関係を詳細に検討しました。

1891年から94年にかけて成立した露仏同盟は、フランスとロシアを政治的にも経済的にも接近させることになりスラヴ研究の面にもそれがあらわれてきました。すなわち「東洋

3) レジェには次のような著作があります。

La comédie russe au XVII^e siècle, Genève, 1890 ; *La Russie intellectuelle*, Paris 1914.

4) ドゥニは *Du Varar à la Sotcha*, Paris, 1923. などを著わしました。

5) Eugène-Melchior Vogüé, *Le roman russe*, Paris, 1886,

6) A. Leroy-Beaulieu, *L'Empire des Tsars et les Russes*, Paris, 1881-1889, 3v.

A. Rambaud, *Histoire de la Russie depuis les origines jusqu'à 1884*, Paris, 1884.

7) Emile Haumant, *La culture française en Russie (1700-1900)*, Paris, 1910. ●

語学校」においても、1890年からメイユ (Antoine Meillet)⁸⁾ がスラヴ語及び古代スラヴ語、比較文法の講義を規則的に行うようになり、また1891年からポール・ボワイエ (Paul Boyer)⁹⁾ がロシア語の教授を担当し始めました。このボワイエという人はすぐれた学者であるとともに、多くの弟子を養成した人物で、その中には後に「スラヴ研究所」の所長となり、数々のすぐれた業績を残して今年(1967)の夏亡くなった、アンドレ・マゾン (André Mazon)¹⁰⁾ や、ゲルツェンに関する論文で学位を取り、のちパリ大学の教授となったラブリー (R. Labry)、美術史の領域で仕事をしたルイ・レオー (Louis Réau)、演劇史のパトゥィエ (Jules Patouillet)、アヴァクムの自伝と分離派の研究で金字塔ともいべき業績をうちたて、今日なおかくしゃくたるピエール・パスカル (Pierre Pascal) らがいます¹¹⁾。ボワイエは東洋語学校におけるロシア語の授業を大幅に改革して充実させるとともに、1911年にはペテルブルグにフランス研究所 Institut Français を創設して、前記のすぐれた弟子たちを派遣して、次代の研究者を育成し、且つフランスとロシアの文化的交流に大きな貢献をしました。

雑誌「ル・モンド・スラヴ」の発行と「スラヴ研究所」の創立

かくして出発したフランスのスラヴ研究は、第一次世界大戦の勃発によって、組織化の方向を取るようになります。もともとフランスには、スラヴ諸国と手を結ぶことによってドイツに対抗しようという考えが伝統的に強くありましたが、第一次大戦に際して世論もスラヴ諸国に味方したことが、以下に述べる雑誌の発行とか研究所の創設の機運を強めた

8) メイユには以下の著作があります。 *Le slave commun*, 2^e édition, revue et augmentée avec le concours de A. Vaillant, Paris, 1934. 同じく Vaillant との共著で *Grammaire de la langue serbo-croate*, 2^e édition revue, Paris, 1952. また *Revue des Etudes Slaves* の第16巻は彼の特集になっています。

9) Boyer の人と業績については *Mélanges publiés en l'honneur de M. Paul Boyer*, Paris, 1925, 及び A. Mazon, "Paul Boyer," *Revue des Etudes Slaves*, t. XXVI pp. 7-13. を参照。

10) マゾンは語学、文学の双方にわたって実に多くの業績を残していますが、ここでは以下にとどめます。

André Mazon, *Grammaire de la langue russe*, 4^e édition, Paris, 1963 — . *Emploi des aspects du verbe russe*, Paris, 1914 — . *Un maître du roman russe ; Ivan Gontcharov, 1812-1891*, Paris, 1914 — . *Manuscrits d' Ivan Tourguénev : notices et extraits par A. Mazon*, Paris, 1930 — . *Le slavo d' Igor*, 1940. なお *Revue des Etudes Slaves* の第27巻は彼の特集号 *Mélange André Mazon* となっています。

11) Raoul Labry, *Herzen et Proudhon*, Paris, 1928 — , *Alexandre Ivanovič Herzen (1812-1870) : Essai sur la formation et le développement de ses idées*, Paris, 1928.

Louis Réau, *L'art russe des origines à Pierre le Grand*, Paris, 1921.

———, *L'art russe de Pierre le Grand à nos jours*, Paris, 1922.

Jules Patouillet, *Ostrovski et son théâtre de moeurs russe*, Paris, 1912.

———, *Le théâtre de moeurs russe des origines à Ostrovski (1672-1850)*, Paris, 1912.

Pierre Pascal, *Avvakum et les débuts du raskol ; la crise religieuse au XVII^e siècle en Russie*, Paris, 1938 (2^e, 1963).

———, *La vie de l'archiprêtre Avvakum écrite par lui-même, et sa dernière épître au Tsar Alexis*, Paris, 1938 (2^e, 1960).

ということが出来ます。

まず1915年の夏、高等教育局 (La Direction de l'Enseignement Supérieur) はパリ大学の学長に対し、その高等研究所 (Ecole Pratiques des Hautes Etudes) に、スラヴ諸民族の民族学と歴史の講義を創設する可能性を諮問しました。そこで、1916年1月13日パリ大学文学部にこの問題を審議すべくフランスの主だったスラヴ学者が集りましたが、そのイニシアティブをとって会議をすすめたのは前記のエルネスト・ドゥニで、集った顔ぶれは前に述べたルイ・レジェ、ポール・ボワイエ、エミール・オーマン、アンドレ・リロンデル、アントワヌ・メイエ、ルイ・レオ、それにゲルマニストから転向して、ロシアの文学、言語、心理、風俗など幅の広い著書をあらわしたジュール・ルグラ (Jules Legras)¹²⁾ オーストリア・ハンガリーの研究で学位を取り、後ながく「スラヴ研究所」の理事長をつとめたルイ・アイゼンマン (Louis Eisenmann)¹³⁾、それにヘレニストのヴィクトール・ベラルール (Victor Berard) などでした。この会議において、一連の学術講演会を組織することが決定されるとともに、つい先頃英国の King's College に “School of Slavonic Studies” が創設されることが本決りになったこと¹⁴⁾も刺戟となって、パリにもスラヴ研究のセンターを作ることが重要な問題になりました。

かくて同年2月より4月まで何回かにわたってスラヴ研究に関する学術講演会が開かれましたが、まずベラルールの「フランスとスラヴ」を皮切りに、マサリック (Thomas Masaryk — 後にチェコスロヴァキアの大統領となった彼はフランスのスラヴ研究に特にふかい関係を持っていますが、これについてはあとで述べます) の「世界の中のスラヴ民族」、メイエの「スラヴ語の性格」、ボワイエの「ロシア、歴史」、オーマンの「ロシア語」、リロンデルの「ロシアの文学」、レオの「ロシアの美術」、ドゥモフスキー (Roman Dmowski) の「ポーランド」、ラブリーの「ブルガリア」、ツヴィーイッチ (Jovan Cvijič) の「セルビア」、ベネシュ (Edward Beneš, 彼についても後にふれます) の「チェコスロヴァキア」、アイゼンマンの「スラヴの一体性 (solidarité)」、ドゥニの「スラヴの未来」といった、かなり啓蒙的色彩のこい講演が次々に行われました。この連続講演会は成功をおさめ、5月13日の第4回会合では、つづいて「スラヴ民族の宗教」と題する連続講演会を開くことがドゥニによって提案され、可決されました。

ドゥニはこれより前、すでに1901年からソルボンヌにおいてロシアとバルカンの政治問題に関する講義を行っていましたが、これはその後、第1次大戦後の1921年に「スラヴ諸民族の文明と歴史」の講座として正式に常置のものとなります。また大戦中に、東洋語学校にポーランド語、セルビア語、ブルガリア語の講座が増設され、またソルボンヌと東洋語学校の両方に、東欧史の講座が認められるようになりました。

12) 彼にはハイネについての著作などがありましたが、1895年 *Au pays russe* でロシアに移り、1929年には主著 *La littérature en Russie* を出しました。

13) Louis Eisenmann, *Le compromis austro-hongrois*, Paris, 1904. 彼は Miliukov, Seignobos と共著で *Histoire de Russie*, Paris, 1932-33 も著わっています。

14) この間の事情については R. W. Seton-Watson, “The Origins of the School of Slavonic Studies,” *Slavonic Review*, January, 1939, pp. 360-371. 及び “The School of Slavonic and East European Studies: The First Fifty Years,” *Slavonic and East European Review*, Jan., 1966, pp. 1-30 参照。

このようなスラヴ研究の進展は、ついに1917年になって、月刊誌「ル・モンド・スラヴ」の発刊を見るに至りました。この雑誌もまたドゥニの多年の努力が時流を得てみのもたと言えますが、その創刊号の巻頭言において彼は、従来フランスはスラヴ世界についてあまりにも無知であり、そのため大きな代償を払ってきたが、今やドイツに対抗してフランスとスラヴ世界はより固く結びつくべきであり、そのためには、従来一部の学者だけの狭い世界に閉じこめられてきたスラヴ研究の成果を、ひろくフランスの知識人一般に開放する必要があると力説しました。そして、スラヴ世界を理解するためには、単に個々の国の外交政策を研究したり、文学作品を読むだけでは不十分であって、自然、地理、産業、宗教、人種、とくに歴史を研究する必要がある、と言っていますが、ここには、従来のせまい意味でのスラヴ研究から脱して、積極的により包括的な地域研究をめざす姿勢がすでに見られます。このようにドゥニは新しい雑誌のめざす啓蒙的性格を述べつつも、同時にその精神が純粹に科学的なものであって、事実を判断するよりも理解するように努めるものであることを主張しています¹⁵⁾。

以上のような目的をもって発行された「ル・モンド・スラヴ」は、1917年7月から翌18年6月まで毎月あるいは合併号の形で隔月に発行されましたが、それは次のような内容と特徴を持っていました。

構成は、(1)五ないし六篇の論文、(2)Variété et Document と題する数篇(2～5)の時事問題に関する資料と情報、(3)書評数篇。この(1)の論文は、歴史、政治、経済、社会、外交、文学、民族問題に関するものであって、この点は以下に述べます第2シリーズになっても変ることなく一貫した方針で続き、言語学、文献学、文学史を中心とする「ルヴェ・デ・ゼチュード・スラヴ」とは大いに異なるところです。(2)に関しては、当然のことながら、ロシア革命に関する記事が多く、この事件が当時どのように報道され理解されたかを知るよい手がかりを与えてくれます。(3)の書評は、創刊号の巻頭言でスラヴ諸国で発表された重要な書物はすべて取り上げるといっているにも拘らず、事実上、フランスで出たものが大部分でした。

しかし十月革命と、それにつづくソビエト政権のドイツとの単独講和は、フランスの世論を急速に反ソ的にさせ、かかる時期に雑誌の刊行を続けることは当をえないと判断したドゥニは、ついに丸一年たった1918年の6月号で一応発行を打ち切ることになりました。しかしその後6年たって、この雑誌は1924年11月から新たに第2シリーズとして発行されるようになりますが、この間にドゥニは亡くなり、次の五人が編集に当るようになりました。アイゼンマン(パリ大学教授、スラヴ研究所理事長)、フルノル(Etienne Fournol、元下院議員、建設省名誉局長、後にスラヴ研究所副所長)、コーヴァン(Auguste Cauvain、アカデミー・デ・シヤンス・モラル・エ・ポリティクの教授)、ルグラ(ディジョン大学教授)、モイセ(Henri Moysset、海軍兵学校教授)。

復刊第一号の巻頭には「われらのプログラム」と題する、これら五人の編集委員の一文が掲載されていますが、そこには同雑誌復刊の理由として、ロシア革命及びオーストリ

15) Ernest Denis, Robert de Caix, "Notre programme," *Le Monde Slave*, 1917, No. 1, pp. 3-17.

ア・ハンガリー帝国の崩壊と新興諸国の誕生というスラヴ世界の大きな変化に際して、従来の狭い枠を脱した研究が要請されるようになったこと、マサリックが「スラヴ研究所」の開所式で述べたように、今ほど西欧諸国にスラヴ世界を知らせ、またスラヴ諸国に西欧世界を知らせる大切な時期はないこと、さらに「スラヴ研究所」の創立に象徴されるフランス本国の研究の発展と、イギリスの School of Slavonic Studies やイタリアの Istituto per l'Europa Orientale の発足にみられる外国（これには新しく生まれたスラヴ諸国も含まれます）におけるスラヴ研究の進歩、といったことがあげられています¹⁶⁾。またこの一文を読んで特に感じられるのは、フランスの学者がドイツのスラヴ研究に対して並々ならぬライバル意識を持っていたということ、敗れたりとはいえ、ドイツはスラヴ世界に対する影響力を失っておらず、また特にそのポーランドとの関係を考えるならば、新しい戦争の可能性が皆無とはいえない、だからこそ西欧、就中フランスとスラヴ諸国とのより強い結びつきが必要なのだということが、くりかえし強調されています。

このようにして復刊した「ル・モンド・スラヴ」は、以前の第1シリーズとほとんど体裁が変わっていません。即ち一冊約160頁の月刊誌で、第一部には四ないし五篇の論文がのっていますが、これは以前同様、歴史、政治、経済、外交を扱ったものが多く、また大きな論文は何回かに分れて掲載されています。第二部は五・六篇の Variété et Document で、ロシア革命や、ソビエトの政治・社会を報じたものが多く、スラヴ諸国の中でロシア（ソビエト）の比重のぐっと大きくなっていることは、「ロシアなくしてスラヴ世界を考えることはできず」、「ヨーロッパにとってもロシア問題はもっとも大きなものである」との復刊第一号の巻頭言からも、うなずけます。

いずれにしてもこの雑誌はあとで述べる「ルヴェ・デ・ゼチュード・スラヴ」よりも、はるかに啓蒙的色彩がつよく、この点では現在米国で出ている「Russian Review」に似ているとも言えますが、よりアカデミックな「ルヴェ」とこれが並存していたことはフランスのスラヴ研究にとって、よいことでした。しかるにこれが1938年7月号をもって廃刊になるや、第二次大戦後20年近くたってようやく、「カエ・ドゥ・モンド・ルス・エ・ソヴィエティック」(Cahier du Monde Russe et Soviétique) が発行されるまで、フランスには専門誌として「ルヴェ」だけが残ることになり¹⁷⁾、これが第二次大戦後今日までフランスのスラヴ研究が政治学、経済学、歴史学といった分野でアメリカに大きく遅れをとるようになった理由の一つのようにも思われます¹⁸⁾。

いずれにしましても、この第1・第2シリーズあわせて15年間続いたこの雑誌は、今までわが国ではほとんど利用されずにあったと思われませんが、パリに亡命していたミリュコーフやマサリックの寄稿、そしてデカプリスト(1925. No. 12)や、トルストイ(1928. No. 8),

16) “Notre programme,” *Le Monde Slave*, novembre, 1924, No. 1, pp. 1-18.

17) 亡命者が出していた雑誌(いずれも短命)は沢山ありました。

18) もっともこれは philologie や linguistique をもって、スラヴ研究の中心と考える、フランスの伝統的な考え方も関係があります。事実先に述べた五人の編集者は学者としては決して一流の人たちではなく、この点「ルヴェ」にくらべると見劣りがするのは事実です。しかしもしドゥニが生きていたらあるいはもう少し事情が変わっていたのではないかと、思われなくてもありません。

ドゥニ (1928. No. 11), ミツキエヴィッチ (1929. No. 6) についての特集のほか, ロシア革命10周年記念特集 (1927. Nos. 11-12) などもあるが, 今後わが国でももう一度顧みられてよいのではないかと思います。

先のドゥニを中心とするフランスのスラヴ学者のパリに研究のセンターを作るという構想は, ついに大戦後の1919年になって, ミシュレー街9番地 (9 rue Michelet) にある Denis-Friedel 家の有する家屋を新設の研究所にあてるとともに, チェコスロヴァキア政府の緊急援助金をえて, ここに実現のはこびとなりました。かくてドゥニは, 「スラヴ研究所」 (*L'Institut d'Etudes Slaves*) と題する一文の中で, パリがスラヴ以外の地域におけるスラヴ研究のセンターになったことを誇らしげに宣言すると同時に, 次のような見解を披瀝しました。まず第一にフランスとスラヴは2000年来 (!) 協力してドイツと戦ってきたこと, しかし第一次大戦の戦後処理の不手際から世界の平和は未だ確立せず, その保証のためにはフランスとスラヴの同盟が確固として成立すべきであり, しかもこの同盟は双方の親密にして永続的な理解にこそとづくべきであること。第二に, かかる目的から設立された「スラヴ研究所」は, 純粋に科学的な性格を有すべきであって, 具体的には, スラヴ研究者相互の接近をはかり, フランス及び諸外国の研究者に研究と討論の場を提供するものであること。また内外の専門家による公開の学術講演会を持つことによって, スラヴ諸国の政治的・経済的・知的・精神的発達を理解することにつとめ, 且つ厳密に学問的であると同時に興味ある論文をのせた雑誌を刊行すること。さらに図書館を作って研究者に便宜を供するとともに, パリで学ぶスラヴ諸国の学生のための研究指導の仕事も兼ねるようにすることなどです。

ドゥニはその後2年たった1921年の1月に亡くなりましたが, 以上のドゥニの理想は, この年の8月12日, チェコスロヴァキア政府がパリ大学に100万フランの寄付をし, これにもとづいて大学が先の Denis-Friedel 家を買って, これを大学附属の研究所としたことで施設として確立され, また同年雑誌「ルヴユ・デ・ゼチュード・スラヴ」が発行されるようになったことで実現されることになりました。そして, 基本的には, 先に述べたドゥニの研究所についての構想は, 今日まで変ることなく続いていると言ってよいでしょう。ところでこのチェコスロヴァキア政府の援助というのは, 同国の初代大統領たるマサリックが個人的にドゥニと親しい間柄にあり, すでに1919年の春に, 同じく後に新政府の外相 (その後首相, 大統領) となったベネシュとともに, パリにおけるスラヴ研究所の創設についてドゥニと話合っていたことが, その発端になっています。なおこの1921年に寄贈された100万フランは, 「スラヴ研究所」の官制化に用いられたほか, ソルボンヌにドゥニの名を冠する「スラヴの歴史と文明」に関する新しい講座の創設のためにも用いられ, これはアイゼンマンが担当するところとなりました。

その後1923年10月17日¹⁹⁾に, マサリックはベネシュと共に「スラヴ研究所」を訪れ, 汎ゲルマン主義に対抗する西欧世界 (とくにその中心たるフランス) とスラヴ世界の結びつきの必要性を強調し, この面での「スラヴ研究所」の意義を高く評価しました。

19) 公式的には, この日が「パリ大学スラヴ研究所」の開所式の日になります。

「パリ大学スラヴ研究所」(L'Institut d'Etudes Slaves de l'Université de Paris)と雑誌「ルヴュ・デ・ゼチュード・スラヴ」(Revue des Etudes Slaves)について

このようにして発足した「スラヴ研究所」は、ドゥニの死後1921年から36年までメイエを所長に、ボワイエ、オーマンら四人の副所長と、アイゼンマンを理事長にして、以下三代目所長マゾン(1937-1959)、そして現在の所長のポルタル(Roger Portal)²⁰⁾と続きます²¹⁾。

次に研究所の規約を見ますと(これは1920年3月9日に出来、その後今年まで数回にわたって、若干の変更が加えられました)、第一条において、その目的を「スラヴ及び東・中欧全般に関する研究を発展させ、それによってスラヴ諸民族とフランスとの絆を緊密化すること」と定めています。なお1922年3月14日の條款(convention)によって、本研究所はパリ大学に附属する自治的な施設(un établissement autonome)と定められましたがこれは第三条のメンバーの資格を理解する上に関係があります。即ち、この研究所のメンバーは、(1) 会員二名の推せんによって、理事会で認められ、年額6フラン(1967年現在)の会費を払った正会員(membre actif)と、(2) 240フラン以上の寄付をし、所長の推せんによって理事会が認めた賛助会員(membre donateur)及び(3) 特に功績があって理事会で認められた名誉会員(membre d'honneur)に分けられます。したがってメンバーになるためには、必ずしもパリ大学に勤務している必要はないわけで、大部分はフランス各地の大学、リセ、研究所につとめている人びとから成っています。理事会を構成する理事は30名で、年次総会で会員の秘密投票により選出されることになっていますが、フランス国籍を持つものに限られています(第5条)。理事会は少なくとも三ヶ月に一回開かれ、メンバーの中から一名の所長と四名の副所長、それに一名の理事長と一名の会計を選び、これらが事務局を構成します(第5、6条)。

研究所の活動に関しては、第2条で次の四つの分野が定められています。

- (1) 図書館の運営と図書購入
- (2) 講義、講演会、集会及び展示会
- (3) 奨学金(旅費及び滞在費)の支給
- (4) 雑誌及び学術書の発行

20) ポルタルの業績については山本俊朗氏の前掲論文を参照。

21) 歴代のメンバーをあげますと、名誉研究所長 Paul Boyer (1948), André Honorat (1950), André Mazon (1959). 所長 Ernest Denis (1920-21), Antoine Meillet (1921-36), André Mazon (1937-59), Roger Portal (1959-). 名誉副所長 Louis Réau (1958), Pierre Pascal (1963). 副所長 Paul Boyer (1920-48), Etienne Fournol (1920-40), Emile Haumant (1920-29), Joseph Reinach (1920-22), André Honorat (1922-50), André Mazon (1929-37), Yves Chataigneau (1937-46, 1953-), André Liron-delle (1945-52), André Vaillant (1945-), Pierre Pascal (1948-63), Louis Réau (1950-58), Roger Portal (1958-59), Jean Fabre (1959-), Henri Granjard (1963-). 名誉理事長 Alfred Fichelle (1959). 理事長 Louis Eisenmann (1922-37), Raoul Labry (1937-50), Alfred Fichelle (1951-59), Henri Granjard (1959-63), Jacques Lépassier (1963-).

ここの図書館は正規の文献購入以外に、1924年にはチェコスロヴァキア政府から1,000冊にのぼる寄贈を受け、また雑誌 *Revue des Etudes Slaves* との交換や、メイエ、アイゼンマンの蔵書の購入によって1966年末にはその蔵書数が52,524タイトルに達しています。その内訳は、ロシア部門15,993タイトル、チェコスロヴァキア部門6,643、ユーゴスラヴィア4,714、ポーランド4,040、ブルガリア2,297、ウクライナ2,151、一般5,264、定期刊行物2,327、これにレジエ文庫2,573、ドゥニ文庫749、トルストイ文庫516タイトルが加わります。一年間の購入数は昨1966年の例で言いますと1,665タイトル、内訳はロシア967、ブルガリア153、ポーランド115、ウクライナ90、チェコスロヴァキア85、ユーゴスラヴィア53、白ロシア44、ルーマニア20などとなっています。

予算は1966年度において収支共に140,000フラン（約1,000万円）で、収入の半分は文部省より、あとはパリ大学、アカデミー、パリ市、ユネスコ、ドゥニ基金などから成り、一方支払いは人件費に59,000フラン²²⁾、文献購入に40,450、出版・印刷費に40,550フランとなっています。

次に出版活動について述べますと、1921年以来今日までひきつづき、雑誌 *Revue des Etudes Slaves* を発行してきました。

これは最初の頃は170頁ほどの小冊子で一卷が二分冊に分れて出ていましたが、その後320-400頁ほどの一冊にまとまって出るようになりました。

編集は第1巻(1921)から16巻(1936)までが、メイエとボワイエを *directeur* に、マゾンが *secrétaire* として出され、第17巻から25巻(1937-49)までがボワイエ、マゾン、ヴァイアン²³⁾の三人を *directeur* に、26巻(1950)から現在までが、マゾンとヴァイアンの二人を *directeur* にして出されています。この顔ぶれからも一見してわかるように、この雑誌の論文は言語学、文献学関係の論文が多く、創刊号の序文においても、メイエはスラヴ学の内容を主に〈la linguistique et la philologie slaves〉と理解しています。

雑誌の内容は現在に至るまでさして変わらず、八ないし九編の論文と、五ないし六編の書評、それに資料が時々掲載されます。さらにこの雑誌の特徴の一つとして、創刊号以来今日まで、各巻末にのる部門別のかなり詳細な *Chronique Bibliographique* があげられます。これは最初のころは25頁程度でしたが、近年では200頁余に及ぶ大きなものとなり、雑誌の三分の二近くを占めるようになりました。内容は、過去一年間にいろいろな国の言葉で発行された単行本、雑誌論文の中、特に重要と思われるものを対象に、仏・英・独のほかロシア語やチェッコ語、ポーランド語などの主要な文献も扱われ、その功績はユネスコによって認められ、毎年この部分は出版助成金をえています。分類は(1)一般(言語学、文献学、

22)「スラヴ研究所」には1967年3月現在、3人の男性の司書と2人の女性の秘書がいます。

23) 彼はメイエの弟子で、古代スラヴ語、スラヴ語の比較文法などの領域ですぐれた仕事をのこしています。ながく東洋語学校の教授をつとめたあと、1952年以降マゾンのあとをうけて、コレージュ・ドゥ・フランスの講座を担当し、現在はその名誉教授となっています。彼の半生と業績については、*Revue des Etudes Slaves*, t. XL, *Mélange André Vaillant* にくわしく、このヴァイアンに捧げられた特集号の序文は、リセー時代の友人であるパスカルが書いていますが、これは簡にして要をえ、しかも友情に満ちた一文となっています。

民話、民俗学、政治・社会、宗教史、考古学と美術史、スラヴ学、ビザンツ学), (2) ロシア (言語、文学と文学史、民話・民俗学、政治・社会・経済史、考古学と美術史), (3) ウクライナ (創刊当初はロシアと小ロシアとして一括していました。言語、文学と文学史、政治・社会・宗教史、民話、民俗学), (4) 白ロシア (言語、文学と文学史、民俗学、政治・社会・経済史), (5) チェッコ (言語、文学と文学史、政治・社会、宗教史と美術史), (6) スロヴァキア (以前はチェッコと一括。言語、民話と民俗学、文学と文学史、歴史), (7) ポーランド (言語、文学と文学史、歴史・経済・社会・政治・文化、美術史と民俗学), (8) ソルブ, (9) ポラーブ (最初の頃はこの項なし), (10) セルボ・クロアチア (言語と文献学、文学と文学史、民話、政治・社会史), (11) スロヴェニア (当初はセルボ・クロアチアと一括), (12) マケドニア (言語、文学と文学史、民話と民俗学、政治・社会・宗教史と地理、考古学と美術史) となっています。

このあと巻末には毎号のようにその一年間に亡くなった各国のスラヴ学者の略伝 (nécrologie) が掲載されますが、経歴と主な業績の紹介も兼ねたこの欄も有益なものです。

このほかすぐれた学者に対し、その友人・弟子などが捧げた論文集の形をとる号もあり、近年では1961年の第38巻がパスカルに、1964年の第40巻がヴァイアンに捧げられています。これには業績目録も巻末にのっていて、それぞれの学者の仕事の全貌をうかがうことができます。因みに前者におけるマゾンの序文と、「金曜日の講義」と題するタピエ (Vactor Tapier) の一文、後者におけるパスカルの序文とマゾンのあとがきとは、いずれも、これら二人のすぐれたスラヴ学者の生き方を通して、フランスのスラヴ研究の性格とあり方とかいったものがよくにじみ出ています。

またこの雑誌の index は第1巻から21巻 (1921-44) までが1949年に出され、22巻から31巻 (1945-54) までが1957年に出版されています²⁴⁾。

次に雑誌以外の「スラヴ研究所」の出版活動について触れますと、「ルヴユ・デ・ゼチユード・スラヴ」の付録の形で次のようなシリーズが出ています。

(1) Travaux Publiés par l'Institut d'Etudes Slaves.

このシリーズは言語学・文献学、文学史、などの分野で29のタイトルが出ていますが、この中には先にあげたマゾンの有名な「イーゴリ軍記」の研究や、メイエの古代スラヴ語の語源に関する研究、*Etudes sur l'étymologie et le vocabulaire du vieux slave*, seconde partie, 2^e édition, 1961. さらにボワイエ (前述) やルグラに捧げられた論文集 *Mélanges en l'honneur de Jules Legras*, 1939. なども入っています。

(2) Collection Historique de l'Institut d'Etudes Slaves.

この歴史シリーズには、18世紀のウラルの工業についてのポルタルの研究、*L'Oural au XVIII^e siècle : étude d'histoire économique et sociale*, 1950. や ノルド (Boris Nolde) の「ロシア帝国の形成」と題する二巻本 *La formation de l'Empire russe*, t. I, 1952, t. II, 1953. そして最近評判の高かったコンフィノ (Michael Confino) の18世紀末の地主経営に関する労作 *Domaine et seigneurs en Russie vers la fin de XVIII^e siècle, étude*

24) なお第27巻の巻末には、第1巻から第25巻までの目次がのっています。

de structures agraires et de mentalités économiques, 1963. など18タイトルが入っています。

(3) Lectures Annotés de l'Institut d'Etudes Slaves.

これには, Jacqueline Mazon の *Lectures tchèques*, 1944. と Elic Borščak の *Lectures ukrainiennes*, 1946. の二点が入っています。

(4) Lectures en Deux Langues de l'Institut d'Etudes Slaves.

トルストイやツルゲーネフの作品とフランス語の訳注とをのせた四点がこれに入ります。

(5) Bibliothèque Polonaise de l'Institut d'Etudes Slaves.

これには Jan Rutkowski の *Histoire économique de la Pologne avant les partages*, 1927. や Bronisław Chlebowski の *La littérature polonaise au XIV^e siècle*. 1933. など四タイトルが入ります。

(6) Collection de Manuels de l'Institut d'Etudes Slaves.

Meillet の *Le slave commun*, 1934, Vaillant の *Manuel du vieux slave*, 2 vols, 1963-64. など六タイトル。

(7) Collection de Grammaire de l'Institut d'Etudes Slaves.

このコレクションには Grappin の *Grammaire de la langue polonaise*, 3^e édition revue et corrigée, 1963. や Mazon の *Grammaire de la langue tchèque*, 3^e édition revue et corrigée par Jacqueline Mazon, 1952. など五点が入っています。

(8) Textes Publiés par l'Institut d'Etude Slaves.

La prise de Jérusalem de Joseph le Juif, texte vieux-russe et traduction française par V. Istrin, André Vaillant et Pierre Pascal, 2 vols, t. I, 1934, t. II, 1938. など五タイトル。

(9) Bibliothèque d'Etudes Balkaniques.

Documents, contes et chansons slaves de l'Albanie du Sud, t. I, par André Mazon, 1936, t. II, par André Mazon et Maria Filipova-Bajrova, 1965. など四点。

(10) Bibliothèque de l'Institut Français de Leningrad.

continuée par la Bibliothèque Russe de l'Institut d'Etudes Slaves.

これはもっとも大きなシリーズで, 現在までに34点出版されています。この中には文学史研究の上で見逃がすことのできぬいくつかの労作がありますが, とくにツルゲーネフに関するマゾンとグランジャールの研究²⁵⁾, チャアダーエフについてのケネーの古典的とも言うべき研究²⁶⁾, ジュコフスキーに関するエーラーの研究²⁷⁾, アレクサンドル・ブロー

25) A. Mazon, *Manuscrits parisiens d'Ivan Tourguénev*, 1930; Henri Granjard, *Ivan Tourguénev et les courants politiques et sociaux de son temps*, 1954; , *Ivan Tourguénev, la comtesse Lambert et "Nid de seigneurs,"* 1960.

26) Ch. Quénet, *Tchaadaev et les lettres philosophiques : Contribution à l'étude du mouvement des idées en Russie*, 1931.

27) M. Ehrard, *V. A. Joukovski et le préromantisme russe*, 1938.

フランスにおけるスラヴ研究の歴史と現状

クについてのボノーの仕事²⁸⁾、ピーサレフについてのコカールの研究²⁹⁾、ネクラーフに関するコルベの労作³⁰⁾、サルティコフ・シチェドリンについてのサーニンの研究³¹⁾、そして前にも言及したアヴァクムに関するパスカルの労作などが、目立ちます。これらの研究はいずれもフランスの文学史研究の伝統に立脚して、ながい年月をかけ、着実に資料を蒐集し検討した上で書かれたものばかりで、現在でもほとんどその価値を失っていない、と言えるものばかりです。従来わが国のロシア文学研究の上で、これらのすぐれた研究が十分参照にされなかったこと、そこから多くの無駄が生じたことは、十分に考えてみる必要があります。

次に講演会について記しますと近年は増加して、年に大体14・5回行われています。これはフランスおよびスラヴ諸国の学者が招かれて、「スラヴ研究所」の会議室で二時間くらい話をし、そのあと質疑をする形をとっており、聴講はだれでも自由で、通常50～60人が聞きに来ます。1966年度の例について言うならば、1月から12月までに16回行われ、ソ連、チェッコ、ユーゴから各2人、ポーランド、ハンガリア、ブルガリアからそれぞれ1人の学者が来て講演をしています。

このほか1966年度は、歴史のアグレガシオンをめざす学生のために、ブザンソン (Alain Besançon)、ララン (Michel Laran) ら6人の少壮の学者が18・9世紀ロシア史の諸問題を、それぞれ自分の研究テーマに即して講演しています³²⁾。

尚、スラヴ諸国とフランスとの間の奨学生の変換は、文部省及び外務省の管轄の下で行われていますが、短期間の者も含めると、その数は人文・社会・自然科学の分野にわたって、わが国とはくらべものにならぬ大きなものになっています。即ち1966-67年度の例について記すならば、ポーランドからは73人がフランスへ、以下ユーゴ65人、ブルガリア32人、ソ連及びルーマニア各24人、ハンガリア14人等となっており、逆にフランスからこれらの国へは、ソ連65人、チェッコ58人、ユーゴ17人、ブルガリア6人（ポーランド23人—但し1965-66年度）がそれぞれ奨学生として行きました。

第二次大戦後の研究の発展—大学・研究機関・専門誌について

1938年9月のミュンヘン協定から、第二次大戦が終了するまでの7年間は、フランスのスラヴ研究にとって、きわめて辛い時代だったと言えますが³³⁾この間もフランスのスラヴ研究は「スラヴ研究所」を中心としてたゆみなく続けられ、戦争が終了するや、1945年にはボルドー大学にスラヴ語とスラヴ文学の講座が、1946年には東洋語学校にスラヴの地理、歴史、文明についての講座が設置され、ついでエクス・アン・プロヴァンス、クレー

28) S. Bonneau, *L'univers poétique d' Alexandre Blok*, 1946.

29) A. Coquart, *Dmitri Pisarev (1840-1868) et l'idéologie du nihilisme russe*, 1946.

30) Ch. Corbet, *Nekrasov : l'homme et le poète*, 1948.

31) Kyra Sanine, *Saltykov-Shtchedrine : Sa vie et ses oeuvres*, 1955.

32) この内容は *L'Empire russe de 1762 à 1855*. Paris, 1966 に発表されました。

33) Alfred Fichelle, op. cit.

ルモン・フェラン、ディジョンの各大学に、新しい講座が設置され、急速な立ち直りと発展を示しました。

かくて現在では、大部分の大学、多くのリセ、コレージュにおいて、ロシア語の授業が行われるに至りました³⁴⁾。大学におけるスラヴ研究の授業について見てみますと、その中心はなんと言ってもパリ大学で、ここの文学部には、ロシア語・ロシア文学・ロシア文明の講座に Henri Granjard と Nicholas Weisbein の二人の教授、三人の講師、一人の maître-assistant、六人の助手の外、ポルタルら三人の chargé d'un cours がいます。ポーランド語・ポーランド文学の講座は Jean Bourrilly 教授を頭に、maître de conférences associé として Stanisław Frybes が、chargé d'un cours に Héléne Strémooukhoff 女史がおり、チェッコ語は Václav Vlasák が、ユーゴスラヴィア文学は Midahat Begić が、セルボ・クロアト語とユーゴスラヴィア文明は Ljubomir Popović が、ブルガリア語は Roger Bernard がそれぞれ担当しています。

次に、1960年に設立されたソルボンヌの「スラヴ歴史研究センター」(Centre de Recherches sur l'Histoire des Slaves) は、Portal を所長に、助手に François-Xavier Coquin³⁵⁾ がおり、また「ポーランド文明センター」(Centre de Civilisation Polonaise) では Frybes が所長を勤めています。

さらに高等研究所 (Ecole Pratique des Hautes Etudes) においては、その第四部門に中世スラヴ語と文学のコースがあって、Vaillant と Jacques Lépissier の二人が指導に当り、第六部門のロシア史では Portal と Besançon が、バルカンの社会史では Georges Haupt が、スラヴ諸国の経済と社会学では Henri Chambre と Basile Kerbley が指導を行っています。この高等研究所の第六部門におけるロシア・ソビエト研究の研究成果は、後述の *Cahier du Monde Russe et Soviétique* に発表されていますが、近年のフランスのスラヴ研究における歴史、政治、経済等の部門への力の入れ方には、著るしいものが感ぜられます。事実サン・ミシエル大通りの131番地には、高等研究所に属する「ソ連とスラヴ諸国に関する資料センター」(Centre de Documentation sur l'U. R. S. S. et les Pays Slaves) が10年程前に創設され、「スラヴ研究所」よりも積極的に新刊書の購入を行い、また内外のビブリオグラフィーの整備に当たっています。尚ここの主任である Alexandre Benningsen はソ連邦内の回教民族の民族問題の専門家です。

次に東洋語学校 (Ecole Nationale des Langues Orientales Vivantes) について記しますと、ここの学生の半分以上がロシア語を取っていると言われるだけあって、ロシア語科には、Jean Train, Jacques Veyrenc, Léon Robel の3人の教授の下に、chargé de cours, chargé de conférences, lectrice 各1人、それに18人もの講師 (répétiteur) がいます。ウクライナ語

34) リセにおいて、ロシア語を学ぶ学生数は次のようになっています。

1962-1963……	11,885 (中第1外語として学ぶもの	372)
1963-1964……	12,407 (”
1964-1965……	12,685 (”
1966-1967……	約15,000 (その半分がパリ)	

35) 彼がクセジユ文庫に書いた「ロシア革命」は邦訳出版されています。

フランスにおけるスラヴ研究の歴史と現状

は Marie Scherrer 教授と講師 1 人, チェッコ語は Yves Millet 教授と助手 1 人, ポーランド語では Etienne Decaux 教授と助手 1 名, セルボ・クロアト語は Henri Boissin 教授と二人の講師, ブルガリア語は Roger Barnard 教授と 1 人の助手となっています。このほか地理には 6 人の chargé de conférences がいて, ソ連 (2 名), ウクライナ, チェコスロヴァキアとポーランド, ユーゴスラヴィア, ブルガリア (各 1) を担当し, 歴史には Michel Laran (ロシア史) と Robert Philippot (ソ連, ウクライナ及びブルガリア史) の二人の教授のほか, 5 人の chargé de conférences がいます。

新設のパリ郊外 Nanterre の文学部にも, ロシア語科が出来, チェーホフの専門家である Laffitte 夫人を教授に, 4 人の chargé d'un cours, 2 人の lectrice, 1 人の maître-assistant, 2 人の助手がいます。

以下フランスの地方大学について1966-67年度の状態を述べますと,

エクス・アン・プロヴァンス (Aix-en-Provence) にはスラヴ語とスラヴ文学の教授として Paul Garde がおり, ほかにロシア語は 6 人, ポーランド語 2 人, セルボ・クロアト語 1 人といったメンバーがいます。

ブザンソン (Besançon) にはロシア語に 2 人の chargé d'un cours がおり,

ボルドー (Bordeaux) 大学には, スラヴ語・スラヴ文学・スラヴ文明の講座にウクライナの専門家である Georges Luciani 教授がおり, 以下ロシア語, ウクライナ語, ポーランド語, チェッコ語, セルボ・クロアト語, 古代スラヴ語に 8 人のスタッフがいます。

カーン (Caen) には José Johannet を頭にロシア語に 3 人。

クレールモン・フェラン (Clairmont-Ferrand) は, ロシア語 7 人, ポーランド語 2 人, セルボ・クロアト, ブルガリア語各 1 人。

ディジョン (Dijon) 大学は Charles Corbet 教授以下, ロシア語 7 人, チェッコ語, ポーランド語, セルボ・クロアト語各 1 人。

リール (Lille) には, 少壮の Jean Bonamour がスラヴの言語・文学・文明の講座を占め, ロシア語 5 人, ポーランド, チェッコ, セルボ・クロアト語各 1 人がいます。

リヨン (Lyon) 大学は, Kyra Sanine 女史が, ロシア語とロシア文学の講座を担当し, ほかにロシア語 5 人, チェッコ, ポーランド, セルボ・クロアト, ブルガリア語各 1 人。

ナンシー (Nancy) は, ロシア語の教授に Milan Markovitch が, ポーランド語の教授には Zygmunt Markiewicz がおり, ほかに 6 人がロシア語, ポーランド語及びセルボ・クロアト語を教えています。

ポワチエ (Poitiers) はロシア語だけ 4 人。

レンヌ (Rennes) は, スラヴ語とスラヴ文学に 2 人, ロシア語に 2 人, セルボ・クロアト語 1 人。

ストラスブール (Strasbourg) は, Robert Triomphe 教授以下ロシア語に 5 人, チェッコ, ポーランド, セルボ・クロアト, ブルガリア語各 1 人。

トゥールーズ (Toulouse) では Hélène Zamoyska 女史がロシア語とロシア文学の講座を持ち, ほかにロシア語 5 人, ポーランド語 2 人。

トゥール (Tours) では二人がロシア語を教えています。

尚、ストラスブールには「ソ連・東欧研究センター (Centre de Recherches sur l'U. R. S. S. et les Pays d'Est)」があり、ここのスポンサーでパリの国立科学研究所 (Centre National de la Recherche Scientifique, 通常 C. N. R. S. と略) から1960年以来、*L'U. R. S. S. et les Pays d'Est, revue des revues* が年4回発行されています。これは二部に分れており、その第1部はソ連及び東欧諸国の法律、経済、社会、文化に関する論文の中から重要と思われるものを選んで、その概要に注釈をつけたもので、類書としてはアメリカの *Current Digest of Soviet Press* があります。第2部はこれらの論文ののった雑誌の内容の index となっています。

先に少し触れた *Cahier du Monde Russe et Soviétique* は、1959年5月から年4回出されています。前述のように、フランスのスラヴ研究は、言語学、文献学が中心であり、この分野では世界でも指導的な役割を果たしてきましたが、それ以外の歴史、政治、経済、社会学といった分野では、第二次大戦後アメリカに圧倒されてしまった感があります。そこで高等研究所の第六部門 (経済・社会部門) のロシア・ソビエト関係の指導を充実させると共に、資料センターを作ったりして力を入れてきましたが、1959年の春からついに専門誌を出すはこびになりました。最初の編集委員は Jacques Bellon (ソビエト法)、Henri Chambre (ソビエト経済)、René David (私法)、Claude Frioux (ロシア文学)、Basile Kerblay (ソビエト経済)、Jean Train (ロシア語及びロシア語教育)、Stuart Schram (ソビエト政治) に、Portal と Benningsen の二人が加わって、人文・社会科学の各分野を一応ひろく代表しています。内容は三ないし五篇の論文と、二篇ほどの chroniques と題する研究ノートと学界動向を兼ねたもの、それに資料とビブリオグラフィーが加わります。論文にはフランス以外に米・英・ソビエトの学者が寄稿していることもあります。しかし本誌の特色の一つは、そのビブリオグラフィーで、第一線の学者がそれぞれの研究分野に即して実に詳細な文献の紹介を行っています。(たとえば Benningsen のソ連におけるクルド研究の紹介、Quelquejay のソ連邦内の回教徒に関するもの、Haupt のロシア・ソビエト史に関するビブリオグラフィーの紹介など。)

論文は、さまざまな分野の学者が寄稿しているので、そこに一つの主流を見ることは出来ませんが、18-19世紀ロシアの社会経済史に関するもの³⁶⁾と、革命運動史に関するも

36) M. Confino, *Maîtres de forges et ouvriers dans les usines métallurgiques de l'Oural aux XVIII-XIX^e siècles*, Vol. I, No. 2, pp. 239-284,

—————, *Grèves dans l'Oural au XIX^e siècle*, Vol. I, No. 2, pp. 332-350.

V. K. Jacunskij (AHCCCP), *La révolution industrielle en Russie*, Vol. II, No. 3, pp. 299-312.

S. Blanc, *A propos de la politique économique de Pierre le Grand* Vol. III, No. 1, pp. 122-139.

—————, *Aux origines de la bourgeoisie russe*, Vol. V, No. 3, pp. 294-301.

R. Portal, *Industriels moscovites : le secteur cotonnier (1861-1914)*, Vol. IV, Nos. 1-2, pp. 5-46.

P. Péchoux, *La commune rurale dans "L'Empire des tsar" de J. H. Schnitzler*, Vol. VI, No. 3, pp. 367-398.

B. Kerblay, *Les foires commerciales et le marché intérieur en Russie dans la première moitié du XIX^e siècle*, Vol. VII, No. 3, pp. 414-435.

J. P. Le Donne, *La réforme de 1883 au Caucase*, Vol. VIII, No. 1, pp. 21-35.

G. P. G. Sinzheimer, *Les industries «kustar'» : un chapitre de la révolution industrielle en Russie*, Vol. VIII, No. 2, pp. 205-222.

フランスにおけるスラヴ研究の歴史と現状

の³⁷⁾に比較的多くの研究が集中していると言えましょう。

図書館について

次に図書館について簡単に記しますと、

(1) 国立図書館 (Bibliothèque Nationale, 58 rue de Richelieu, Paris II^e) がまずあげられます。単行本、定期刊行物も含めて、蔵書数は圧倒的にここが多く、また参考事業も行っています。(Service Slave, 65 rue de Richelieu)。

(2) 東洋語学校図書館 (Bibliothèque de l'École Nationale des Langues Orientales Vivantes, 2 rue de Lille, Paris VII^e)。蔵書数から言って、国立図書館に次ぐのがここです。

(3) スラヴ研究所図書館 (Bibliothèque de l'Institut d'Etudes Slaves, 9 rue Michelet, Paris VI^e)。これについては既に述べましたが、館外貸出しは一切認めていません。

(4) ソ連・スラヴ諸国に関する資料センター (Centre de Documentation sur l'URSS et les Pays Slave, 131 Bd. St-Michel, Paris V^e)。ビブリオグラフィーが整っている。

(5) パリ大学図書館 (Bibliothèque de l'Université de Paris, 47 rue des Ecoles, Paris V^e)。

(6) スラヴ歴史研究センター図書館 (Bibliothèque du Centre de Recherche sur l'Histoire des Slaves, 17 rue de la Sorbonne, Esc. C, 3^èm étage, Paris V^e)。大学の研究室程度の小さなもの。

(7) パリ大学文学・人文学部図書館 (Bibliothèque du Centre Universitaire du Grand

37) M. M. Karpovich, *Chernyshevsky between Socialism and Liberalism*, Vol. I, No. 4, pp. 569-583.

A. Kriegel, *Sur les rapports de Lénine avec le mouvement zimmerwaldien français*, Vol. III, No. 2, pp. 299-306.

G. Haupt, *Correspondance entre Lénine et Camille Huysmans (1905-1914)*, Vol. III, No. 4, pp. 582-665 ; Vol. IV, Nos. 1-2, pp. 56-116.

———, *Lénine, les Bolcheviks et la II^e Internationale*, Vol. VII, No. 3, pp. 378-407.

Le dossier de Trotski à la Préfecture de Police de Paris, Vol. IV, No. 3, pp. 264-300.

P. Sorlin, *Pent-on écrire une histoire du parti bolchevik?*, Vol. IV, No. 4, pp. 436-449.

H. Granjard, *Du nouveau sur Herzen*, Vol. V, No. 3, pp. 286-293.

M. Dewhirst, *L'historiographie soviétique récente et l'histoire de la révolution*, Vol. V, No. 4, pp. 549-566.

H. Brahm, *La «révolution permanente» de Trotski et le «socialisme dans un seul pays» de Staline*, Vol. VI, No. 1, pp. 84-99.

M. Lesure, *Les mouvements révolutionnaires russes de 1882 à 1910 d'après les fonds F7 des Archives Nationales*, Vol. VI, No. 2, pp. 279-326.

M. Mervaud, *Bakounine, le Kolokol et la question finlandaise*, Vol. VII, No. 1, pp. 5-36.

T. Bakounine et J. Catteau, *Contribution à la biographie de Serge Néçaeu. Correspondance avec N. Herzen*, Vol. VII, No. 2, pp. 249-264.

Bakounine et Néçaeu, Documents inédits présentés et traduits par M. Confino, Vol. VII, No. 4, pp. 581-699 ; Vol. VIII, No. 1, pp. 56-123.

M. Mervaud, *Faut-il présenter Ogarev?* Vol. VIII, No. 1, pp. 45-55.

J.-J. Marie, *Le Comité Militaire Révolutionnaire du Soviet de Petrograd et son président*, Vol. VIII, No. 2, pp. 189-204.

Palais [Faculté des Lettres et Sciences Humaines de Paris], Perron Alexandre III, Cours-la-Reine, Paris VIII^e).

(8) ポーランド文明センター (Centre de Civilisation Polonaise, 15 rue Champollion, Paris V^e).

(9) スラヴ図書館 (Bibliothèque Slave, 33 rue de Sèvres, Paris VII^e).

(10) パリ・ポーランド図書館 (Bibliothèque Polonaise de Paris, 6 quai d'Orléans, Paris IV^e).

(11) ツルゲーネフ図書館 (Bibliothèque russe Tourguénev, 11 rue de Valence, Paris V^e). これは作家のツルゲーネフではなく、デカブリストのニコライ・ツルゲーネフに因んだもの。

(12) 現代国際資料図書館 (Bibliothèque de Documentation Internationale Contemporaine, 5 rue Auguste-Vacquerie, Paris VI^e).

このほか国立古文書館 Archives Nationales や外務省、パリの警視庁等にも豊富な史料のあることが報告されています³⁸⁾。またこれらパリの図書館にあるスラヴ関係の定期刊行物については、すでにずっと以前にまとまった一冊の本が出ています。³⁹⁾

最近の研究状況

最近のフランスにおけるロシア・ソビエト研究の状況については、1962年度以降、*Cahier du Monde Russe et Soviétique* 誌上に、「ロシア・ソ連邦についてフランスであらわれた作品目録」が毎年掲載されているので、スラヴ全般というわけにはいきませんがロシア・ソ連については、かなり詳細に知ることができます。

これによりますと、1962年度に出た単行本・論文・翻訳の数は全部で974点、1963年度には1,481点、1964年度には1,349点となっています。この1964年度分の内訳をみますと、

- | | |
|--------------------------------|-----|
| (1) 一般 (ビブリオグラフィーなど) | 92 |
| (2) 地質・地理学 | 13 |
| (3) 歴史 (ロシア・ソ連史) | 201 |
| (4) 政治 (内政・外政, 共産党史, 少数民族の問題等) | 433 |
| (5) 法律 | 9 |
| (6) 経済 (工業, 農業, 通商, 統計) | 175 |

38) M. Lesure, "Aperçu sur les fonds russes dans les Archives du Ministère des Affaires Etrangères français," *Cahier du Monde russe et soviétique*, Vol. IV, No. 3, pp. 312-330.

———, Documents relatifs à l'histoire russe dans les Archives du Service historique de l'Armée, antérieurs à 1914," *ibid*, Vol. VII, No. 1, pp. 113-156.

39) Boris Unbegaun, *Catalogues des périodiques slaves et relatifs aux études slaves des bibliothèques de Paris*, Paris, 1929. その後1956年に国立図書館からキリル文字の定期刊行物蔵書カタログが出されました。Bibliothèque Nationale, *Périodiques slaves en caractères cyrilliques, état des collections en 1950*, t. I-II, Paris, 1956.

フランスにおけるスラヴ研究の歴史と現状

- (7) 社会生活・生活条件・教育 51
- (8) 言語 21
- (9) 文学・演劇 176 (一般2, ロシア文学61, ソビエト文学85, 演劇5, 比較文学・文化的影響及び関係13)
- (10) 美術・映画・考古学・音楽 65 (絵画・彫刻・応用美術11, 考古学2, 映画27, 音楽・舞踊25)
- (11) 哲学・イデオロギー・マルキシズム・宗教 37 (哲学12, 宗教25)
- (12) 科学・天文学・技術 86

となっています。

また博士論文については、同じく *Cahier du Monde Russe et Soviétique* の第6巻3号(1965)に、1888から1964年まで、正副論文あわせて295篇の一覧表がのっています。これによってその内訳を見ますと、

- (1) 経済 49
- (2) 法律・国家組織 13
- (3) 歴史 37
- (4) 外交 35
- (5) 文献学 10
- (6) 文学・哲学 72 (この中にはトルストイに関するものが9篇でもっとも多く、ついでドストエフスキーに関するものが8篇、ツルゲーネフ4篇、ベルジャーエフ3篇など)
- (7) 美術・音楽 4
- (8) 医学 10
- (9) 民族・地域研究 49 (リトアニア15, アルメニア9, ラトビア5, エストニア2, 中央アジア2, コーカサス2, ウクライナ2, フランスにおけるロシアの亡命者・移民問題5など。)

1945年から1964年迄の戦後20年間に法律部門で48(中パリ大学38), 文学部門で77(中パリ大学71)の博士論文が通過しましたが、これはそれ以前の時期(1918-1945)にくらべますと、法律部門において減少(77から48へ)したかわりに、文学部門がいちぢるしく増加(25から77)しているのが特徴的です。そして文学部門においても、テーマが多岐にわたるとともに、文学プロパーに比し、歴史的研究が増加するようになり、以前は大多数を占めていた文学・文献学の論文数は、77の中約30を占めるにすぎなくなりました。大学別では、パリ大学が圧倒的に多く、地方大学は最近20年間に各部門で1人ないし2人を出しているにすぎません⁴⁰⁾。

1965年度の博士論文は全部で11編で、うち1篇(経済)だけがリヨン大学で、あとの10

40) M. Seydoux, "Les thèses concernant la Russie et l' U. R. S. S. soutenues en France de 1888 à 1964" *Cahier du Monde Russe et Soviétique*, Vol. VI, No. 3, pp. 437-465.

篇は全部パリ大学ですが、その内訳は次のようになっています⁴¹⁾。

歴史 1 点, 外交 2 点, 言語学 3 点, 文学 3 点, 民族問題 (アルメニア関係) 1 点。

(Sapporo, décembre, 1967)

41) "Thèses concernant la Russie et l' U. R. S. S. soutenues en France en 1965," *Cahier du Monde Russe et Soviétique*, Vol. VII, No. 2, pp. 284-285.